慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古典学派トランスファー理論の再検討
Sub Title	Re-consideration of classical theory of transfer
Author	安井, 孝治
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.5 (1951. 5) ,p.203(25)- 223(45)
JaLC DOI	10.14991/001.19510501-0025
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19510501-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

いふ證明にはならない。

（＊例へば小泉信三「マルクス死後五十年」三五頁以下、一四五頁以下（好學社　昭和廿一年）

＊＊マルクス・エンゲルス全集十五卷三四六頁（改造社版　昭和五年）

＊＊＊柳田謙十郎「マルクス主義とヒューマニズム」勞働文化社編「マルクシズムに對決するもの」一二三頁以下（昭和二十四年）

まして人道主義的であることが、唯物辨證法と矛盾しないなどといふことにはならないのである。

自由と必然、存在と當爲の理論と實踐のいはゆる辨證法的統一は實に、發展が卽ち進歩であるといつたやうなドグマの上に立つて漸く成立つてゐるのである。必然といひながら樂園を待望せしめ、自由といつて必然に服從せしめ、當爲といつて本能的鬪爭をあふるのも、すべて必然の唯物的解釋と發展と進歩との混同に由來するといふことができるであらう＊。

＊本論文の目的は、はじめに述べた通り、理想主義の立場を基礎づけながら自由の合理的解釋を說明することに在つたのであるが、すでに許された紙數をかなり超過してしまつたので、一應唯物論の矛盾を衝くだけで終らなければならなかつた。後の機會にこの續稿を書くつもりである。

古典學派トランスファー理論の再檢討

安井孝治

はしがき

從來、古典學派の國際經濟理論に關しては、國際金融論に於ても、又國際貿易論に於ても、幾度となく論ぜられて來た。然しながら、其の場合、すべてが國際經濟理論として綜合的、統一的に把握されるべきであるにも拘らず、貿易理論、トランスファー理論、及び爲替理論等が、概して、夫々個別的にのみ論ぜられ、取扱はれて來たのであり、その結果として、古典學派の國際經濟理論の解釋に於て著しい混亂を招いてゐるやうに思はれる。例へば、近代貿易理論に於てはミルの立場が主流となつてゐるにも拘らず、トランスファー理論に於てはミルの立場は古典的理論であり、リカアドォは近代的理論の先驅者であると一般に解釋されてゐる。果して、かゝる混亂はそのまゝ承認し得るものであらうか。

本稿は、國際價格理論研究途上に於ける、古典學派トランスファー理論の解釋に關する一試論である。

一

古典學派の國際貿易理論に於ける根本前提は、生産要因、即ち勞働及び資本の國際的自由移動の否定であつた。(註1)この故に、古典學派に於ては、資本移動論は取扱はれることがなかつたのであると、屢〻論ぜられてゐる。(註2)然るに、この點に關してオーリンは次の如く述べてゐる。

「古典學派がこの重要な問題に殆ど觸れてはゐないのは、勞働及び資本の國際的移動が百年以前には今日より遙かに重要でなかつたといふ事實に決して歸すべきでなくて、むしろそれは勞働價値說としての彼等の國際貿易理論の構造に歸すべきであると考へる。(註3)」即ち、オーリンは古典學派に於て資本移動論が取扱はれて居ない事を明確に承認すると共にその理由を古典學派の勞働價値說的立場に求めるのである。確に、イヴェルセン(註4)が言ふ如く、古典學派の理論が勞働價値說に立脚してゐたことは、資本移動論の展開には「特に不幸であつた」と考へられる。然しながら、リカアドォと異りミルの立場は勞働價値說に立脚して居ないにも拘らず、本來の意味に於ける資本移動論を取扱つて居ないという點に於ては、リカアドォもミルも同樣であると言はねばならない。從つて、古典學派の理論に於て資本移動論が取扱はれなかつた理由を、オーリンの如く古典學派の勞働價値說的立場にのみ求めることは出來ないのである。蓋しこの點に關する理由は、古典學派の體系が貨幣ヴェール觀を前提とする物々交換の體系であつたことに歸すべきである。周知の如く古典學派に於ては、勞働及び資本の國際的自由移動の否定なる前提の下に、國際交換理論として比較生産費の原理を樹立したのであるが、それと同時に古典學派がその國際價格理論の中心命題として採り上げたものは、かのヒュームから受繼いだ貨幣數量說に立脚せる物價――正貨流出入機構（Price-specie flow mechanism）であり、(註5)これが古典學派の國際交換理論の貨幣的側面を構成するものであつた。つまり、古典學派は貨幣ヴェール觀に立脚しつゝ國際商品交換に伴ふ國際的産業的流通の過程を論ずるのであつた。そして古典學派の理論に於ては言ふ迄もなく、近代理論に於ける所謂、價値保有手段若しくは資本手段としての貨幣の機能は勿論、國際的金融的流通の過程は殆んど、考察の對象外に置かれて居たのである。かゝる事情からして、古典學派の理論に於ては、所謂經濟的、自發的なる資本移動は取扱はれることはなく、從つて本來の意味に於ける資本移動論は存在しなかつたと言へるのである。(註6)かくて、古典學派に於けるトランスファーの理論は、所謂國際支拂理論、即ち義務的送金（obligatory remittance）等の國際支拂の存在を假定し、かゝる原因に依り一旦破壞された均衡が如何なる過程を經て再び均衡するに至るかといふ均衡化の過程のみを說明するに過ぎなかつたのである。そして國際收支の均衡化の理論として、その過程のみを考へる場合には、國際支拂論も資本移動論も同一に取扱はれ得るのであり、古典學派の國際支拂理論が近代資本移動論と關聯して考察され、その先驅と看做されるのもかゝる觀點に立つからに他ならない。

さて、周知の如く古典學派に於けるトランスファー理論、即ち國際支拂理論は、先づ、凶作に依る穀物輸入超過と金流出とをめぐつてソーントンとリカアドォとの論爭として展開されたのである。先づ、ソーントン及びリカアドォの主張を一應引用し、論爭點を明確にすることが必要である。

ソーントンの論ずるところを引用すれば次の如くである。「貿易差額が（例へば收穫の不良から生じて）甚だしく不利なときには、ある國は海外から大量の穀物の供給を仰ぐ必要に迫られる、が併し、その國がそれと引き換えに充分な量の財貨を即座に供給する手段を持つてゐないこともある、或ひは、それより遙かに多く起りさうな例だし、またイングランドにより多く當てはまると思はれる例だが、不利な差額をもつてゐる國がその債務を辨濟する手段として提供し得る財貨が、海外では餘り需要されないので、その際に輸出を誘ふ價格も、または我慢の出來る價格さへも期待することが出來ないといふ場合がある、またこのやうな需要の不足は、從來から確立してゐる商業に關して、その或

る部面に一時的な杜絶を來させるやうな、何らかの政治上の事情のために、恐らく起るかも知れない。それ故に、貿易差額の有利な國が、或る程度までしきりに支拂を求めており乍ら、而もその差額の支拂ひに必要とされる財貨を補給しても、これを差當つて全部は欲してゐない狀態にあれば、その國は少くとも決濟の一部として金を好んで受取ることになる。蓋し手に餘るほど非常に莫大な他の何らかの商品よりも、金ならば何時でもヨリ有利な用途に向け得られるから。そこで、差額の有利な國をして支拂額の全部を財貨で受取らせ、たとひその一部をも金では受取らないやうにさせるためには、財貨が非常に高價になるのを阻止するばかりでなく、更にそれらを極端に廉くさせることが必須となるであらう。」（註7）

以上の如きソーントンの說明に對して、リカァドォは次の如く主張する。

「ソーントン氏は、何故外國がその穀物の對價として吾々の財貨の受取を喜ばないかを、說明してゐない、しかも氏としては、かゝる不同意の存する場合に於て、何故吾々が吾々の鑄貨の提供を承諾して、相手方の不同意を滿足せしめるのであるかを、說明する必要があるであらう。若し吾々が財貨の對價として、貨幣を提供したならば、それは、必ずや、任意の選擇から行つたのであつて、强制的な必要から行つたものではない。吾々が過剩なる通貨をもち、從つてそれを吾々の輸出の一部たらしめることが適當だといふ場合でなければ、吾々は、輸出するより以上の貨物を輸入しないであらう。鑄貨が輸出されるのは、それが低廉なるためである、鑄貨の輸出は、不利なる貿易差額の結果ではなくて、寧ろその原因である。吾々が鑄貨をより有利なる市場に輸送し得る場合でなければ、または鑄貨よりもより有利に輸出し得るやうな貨物がある場合には、吾々は鑄貨を輸出しないであらう。鑄貨の輸出は、通貨の過剩に對する有益な救濟手段である。」（註8）

以上に於て、周知の引用を長々と試みて來たのであるが、こゝに明白なソーントン及びリカァドォの對立は、資本移動論に於ける近代論者に依つて、資本移動論の先驅と看做され、更にソーントンからマルサス、ミルと受繼がれた前者の立場は、トランスファーの「古典的理論」として、後者のリカァドォの立場は、トランスファーの「近代的理論」として區別されてゐるのである。（註9）

では、如何なる意味に於て、前者の立場は「古典的」であり、後者の立場は「近代的」であるのか。兩者の立場を、一般に承認されてゐる見解に從つて、解釋してみるならば、ソーントンは、輸入超過による國際收支の不均衡を輸出の增加に依つて均衡せしめやうとするならば、輸出品の價格を引下げることが必要であると考へる。追加的に輸出されるべき財貨は從來外國に於てそれに對して需要が存しなかつたものであるから、新に需要を喚起するためには價格を低廉にしなければならぬ。要するに、外國の需要狀態が不變であるといふ前提の下に、國際收支均衡のためには、價格水準の變動が强調される。これに反し、リカァドォは、「ソーントン氏は、何故外國がその穀物の對價として吾々の財貨の受取を喜ばないかを說明してゐない」と主張して、外國の需要狀態に就てソーントンの見解に反對して居り、更に國際收支均衡要因として價格水準の變動に就て何等言及されて居ないことからして、外國の需要狀態を可變的であると考へて居たやうに思はれる。換言すれば、ソーントンは、價格水準の變動のみにて國際收支の再均衡を考へ、購買力の移轉を無視するに反して、リカァドォは、購買力の移轉とそれに伴ふ需要狀態の變動に依つて國際收支の均衡が自動的に成立すると考へたのであると解釋されてゐる。ソーントン及びリカァドォの理論が、近代論者に依つて古典派理論及び近代理論としてそれ〴〵區別され、更に、ソーントンとリカァドォとの理論的對立が、ドイツ賠償金支拂をめぐるケインズとオーリンとの理論的對立の先驅として考へられる根據もこゝにあるのである。だ

が、ソーントン及びリカァドォのそれぞれの理論的立場について以上の如き解釋は、一般に承認されてゐるにしても、そのまゝ認め得るものであらうか。

吾々は、改めてソーントン及びリカァドォの立場を檢討してみる必要があるのである。

（註1）David Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, Gonner's ed, 1924. P. 114. 小泉信三譯「經濟學及課稅之原理」（岩波文庫）一一九頁

（註2）松井榮一「國際資本移動理論序說」（國民經濟雜誌第六十七卷三號七七頁）、松井清「貿易理論の研究」昭和十三年一〇七頁及一〇九頁―一一〇頁、尙この點に關してラグナー・ヌルクセは次の如く述べてゐる。「資本移動の理論は古典學派の後繼者即ち傳統的比較生產費說のその後の代表者や祖述者（主として J. S. Mill, Cairnes, Bastable, Taussig）によつて、從つて少くとも外國貿易理論の側からは、少しも系統的な取扱を受けてきて居らないのは、確に、一部はかゝる前提（勞働及び資本の國際的不動性―安井）を固執したる責に歸せらるべきである。」（Ragnar Nurkse, Internationale Kapitalbewegungen. 1935 S. 9）

（註3）B. Ohlin. Die Beziehung zwischen internationalen Handel und internationalen Bewegungen von Kapital und Arbeit (Zeitschrift für Nationalökonomie 1930. Okt. S. 162)

（註4）Carl Iversen. Aspects of the theory of international capital movements. 1935. P. 9. 「國際資本移動の問題に關しては、勞働及び資本が、すべての商品の生產に於て同じ割合で結合されてゐると言ふリカァドォの假定は特に不幸である。」

（註5）古典學派に於て、貴金屬の國際的分配に關する理論は、國際商品交換理論の半面をなすものであつた。「金及び銀が流通の媒介物に選ばれてゐるので、これらの金屬は商業上の競爭によつて、かゝる金屬が全く存在せずして、諸國間の貿易が純然たる物々交換であつた場合に行はれる筈の自然的交易に適するやうな割合に於て、世界各國の間に分配されるものである。」（Ricardo, Principles. Gonner's ed. P. 117.）

（註6）本文に述べた如き理由とは離れて、一般に、古典學派には、資本移動論が取扱はれなかつたことは確認されてゐる。松井榮一「國際資本移動論序說」（國民經濟雜誌六十七卷三號）參照。

（註7）Henry Thornton, An Enquiry into the Nature and Effects of the Paper Credit of Great Britain, ed. by Hayek. P. 151.

（註8）Ricardo, High Price of Bullion. Economic Essays by David Ricardo, ed. by Gonner. PP. 10―11. 小畑茂夫譯「リカァドォ貨幣銀行論集」四四頁―四五頁

（註9）Carl Iversen, Aspects of the theory of International Capital Movements. chap. 4.

II

さて、以上に述べた論爭を直接に取扱ふ前に我々は、リカァドォ及びソーントンのそれぞれの主張の前提となつてゐる彼等の國際均衡理論を考察してみる必要がある。

リカァドォは、その「地金高價論」の冒頭に於て、國際間に於ける貨幣的均衡狀態を說いて次の如く論じてゐる。

「經濟學について筆をとつた最も定評ある人々の想定するところによれば、世界の貨物を流通させるために用ひられる貴金屬は、銀行の創設されるより前に、地球上の文明諸國間に、それぞれの商業及び富の狀態、從つて各國がなさねばならなかつた支拂の數と頻繁さとに應じて、一定の割合で、分配されてゐた。かくの如く分配されてゐる限り、貴金屬は、到るところに於て、同じ價値を有し、しかも各國は、いづれも現在使用してゐる數量に對して、同じ程度の必要を感じてゐるのであるからして、貴金屬の輸出入を促すべき誘惑は存在し得なかつた。」（註1）

これがリカァドォが彼の理論の出發點に置いた國際間に於ける貨幣的均衡狀態である。

先づ、貨幣（貴金屬）は、流通手段としてのみ考へられてゐる。そして流通手段たる貨幣は國際的均衡狀態にあつては、世界各國に於てそれぞれの國に於ける商業活動、銀行組織、及び貨幣の流通速度等に應じて一定の割合で分配

されて居り、かゝる限りに於て、貨幣はいづれの國に於ても價値が等しくなる。然しながら、この場合若しも貨幣の流通速度、商業上の信用狀態、銀行組織等を一定と假定するならば、流通貨幣の總價値はそれに依つて流通せしめられる財貨の總價値に對して一定の割合を有することになる。(註2)世界各國に於て、貨幣の總價値と財貨の總價値との間にかゝる一定の割合が保證されてゐる限り、即ち貨幣と財貨との間にかゝる一定の價値的相對關係が維持される限り、貨幣は世界各國に於て價値が等しくなり、こゝに國際的な貨幣的均衡が成立するのであつた。(註8)そして、この場合に於て爲替相場は法定平價と一致し、輸出入は均等となり貿易均衡が保證されるのである。

然しながら、ある一國に於て貨幣と財貨との間に於ける一定の相對關係が破壞されるとそれは直ちに國際的不均衡を生じ、貨幣及び財貨の國際的流出入を惹起する。

「今これらの國の中の或る一國に於て、金鑛が發見されたとすれば、その國の通貨の價値は、流通内にもち出される貴金屬の量が增加する結果として、下落し、從つて諸外國のそれと同じ價値をもち得ないこととなるであらう。而して金及び銀は、鑄貨たると地金たるとを問はず、かのあらゆる他の貨物を支配する法則に從つて、直に輸出の目的物となるであらう。即ち、金及び銀は、廉い國を去つて、高い國に行くであらう。而して若しその鑛山が生產的であつたならば、その限度に於いて、金銀の移動は繼續し、結局に於て、鑛山發見前に各國内の資本と貨幣との間に存在したところの比率が回復せられて、金銀が到るところで同じ價値をもつやうになるであらう。その場合、輸出された金の對價として、貨物が輸入されるであらう。」(註4)

一國に於て貨幣が增加すると、即ち貨幣が相對的に過剩となると、貨幣の價値は低下し外國へ輸出され、同時にそれの對價として、財貨が輸入される。その結果、各國に於ける貨幣と財貨との間の相對關係が均等となつた時に再び均衡が成立するに至るのである。更に、完全に金屬貨幣の流通が維持されて居らない場合、即ち流通媒介物たる銀行券が過剩に發行せられた場合に於ても同樣の過程を通じて再均衡に到達することを述べてゐる。だが、こゝに於て、リカァドォの說明は、完全に貨幣數量說的見地――正確に言へば金數量說――に立脚してゐる。リカァドォが、貨幣を流通手段としてのみ把握したことゝ、貨幣價値決定要因として「獲得勞働量」と「稀少性」(註5)とを同時に採り上げやうとすることゝの矛盾が此處に明確に現はれてゐるのである。この點はさて措いて、要するに、リカァドォの論ずるところは、貨幣的均衡狀態を前提として、貨幣的不均衡（貨幣の相對的過剩）→金流出及び同時的な財貨の流入→均衡といふ一聯の過程であつた。

さて、次にソーントンの立場をみるに、リカァドォが貨幣的な面から均衡を規定するに反して、ソーントンは財貨側から均衡の内容を規定して、次の如く述べてゐる。「或る國の商業上の輸出並びに輸入（云ひ換えれば一國が他の國からそれに對する等價物を受取るところの輸出商品および輸入商品）が自然に或る程度まで相互に均衡を得てくるといふことは、一般的な眞理であるといつて宜いであらう、また從つて貿易上の差額（つまり右の商業上の輸出および輸入間の差違をいふ）は非常に長期間に亙つて或る一國に對して著しく有利であつたり、あるひは著しく不利であつたりしたまゝ繼續することは不可能であるといふことも一般的な眞理といへよう。」(註6)

次に、リカァドォが貨幣の相對的過剩といふが如き貨幣側の不均衡から出發するに反して、ソーントンは、「一國の商業上の輸出と輸入の價値は、このやうに相互に均衡化してゆく傾向を示すであらうけれども、それらの間に非常に大きな不均衡がたまたま起らないとは限らないであらう。特に、豐作であるか不作であるかといふことが、この一時的な喰ひ違ひを來させるうへでは著しい影響を持つであらう。」(註7)と論じ、財貨側の不均衡から出發して、さきに引

用した凶作の發生、それに伴ふ穀物輸入超過の場合をとり上げるのである。其處でソーントンの論ずるところは、輸入超過→金流出の過程であるが、この場合ソーントンにあつては、金流出に續く物價水準の下落→輸出超過→金の回流→均衡の成立の過程が豫想されてゐると、當然考へられるのである。（註8）リカァドォにあつては、國際均衡成立の過程に於て、一旦流出した金は、絶對に回流することはないのであるが、ソーントンにあつては、一旦流出した金が再び回流することに依つて完全な均衡が成立する事が、豫想されて居るのである。即ち、リカァドォにあつては、金の移動は回流することなき一方的移動であるに反して、ソーントンにあつては、金移動は回流を豫想せる双方的移動であると言ふことが出來る。

周知の如く、國際均衡理論の先驅として認められてゐるのは、かのヒュームに依る國際間に於ける貨幣的均衡の思想であり、リカァドォの理論もソーントンの理論も共に、その出發點をヒュームの理論に置いてゐると言はれてゐる。そしてこの點に關して、イヴェルセンは、「ヒュームの分析は直接貨幣側のみの攪亂に關係してゐたといふことは、注意すべきことである。このことは、ヒュームの理論は、かゝる貨幣側の攪亂にのみ適用し得るものであるかどうか、或は又、それは、財側に於て生じた攪亂の調節の説明としても亦、使用し得るものであるかどうか、といふ問題を提起する。」（註9）と言ひ、既に、「ソーントンとリカァドォとが意見を異にしたのは、この問題に對する彼等の解答に基づくものであつた。」（註10）と論じ、ヒュームとの關聯に於て、リカァドォの立場とソーントンの立場とを規定してゐる。同樣に、ヴァイナーも、ソーントンの立場を受繼いだミル、タォシックが、ヒュームの分析を適用してゐることを認めてゐるのである。（註11）

尚又、エンヂェルは、リカァドォ及びソーントンの立場について次の如く述べてゐる。

「成程、リカァドォは、相對的に過剩な通貨の調節に適用された場合には、物價――正貨流出入機構の理論を承認した。……

然し、彼は、その結果生ずる正貨流出に依る國際貿易に於ける最初の不均衡の調節を説明する……もう一つの理論を明白に否定したのである。その理論は、ソーントン及び、吾々が後に研究するのだが、ミルに於て見出されるのである。二人の學者は、例へば、穀物の凶作による貿易收支の不利な推移が、金流出とその後に續く價値變化によつて矯正されることを主張したのである。かゝる見解をリカァドォに歸することは、最も明白な誤りである。リカァドォの理論は、專ら、一方的理論であつた。」（註12）

エンヂェルの論ずるところに從へば、リカァドォの理論は一方的理論、これに對して、ソーントンの理論は、双方的理論と規定することが出來ることになるのである。

さて、こゝで改めて、ヒュームの理論との關聯に於て、ソーントン及びリカァドォの立場を考へてみよう。周知の如く、ヒュームの説くところは、貨幣的不均衡は國際物價水準の不均衡を生じ、これが貿易の不均衡を惹起し、そして金が流出するに至るといふ過程である。それ故、イヴェルセンが、「ソーントンに依つて導かれた新しい思想は、正確に、財貨側から生じたるが如き貿易收支の攪亂にヒュームの理論を適用したものであつた。」（註13）と論ずるのは、全く、正しいやうに思はれる。

然し、ヒュームの理論とリカァドォの理論との關聯を考察することは、それ程、容易ではないのである。この場合には、ヒュームの理論とリカァドォの理論との根本的な性格の相違を明確にすることなしに、直接、兩者の理論の間に於ける關聯を考察する事は不可能であると思はれるのである。されば、ヒュームの理論（ソーントン、マルサス、ミル

等の理論も同じ）とリカァドォの理論とを比較して、その間の理論的性格の相違として明確に主張し得るのは、前者の理論が、貿易變動に伴ふ過渡的變動過程を取扱ふに反して、後者、即ちリカァドォの理論的對象として考察するのは決して過渡的變動過程ではなくて、常に均衡の狀態であつたといふ事である。リカァドォは次の如く論じてゐる。

「貨幣の輸出入は、一國が一貨物を他貨物の對價として輸入し、而して鑄貨及び地金が、兩國内に於て、それらの自然的水準を再び獲得するといふことを以て結末をつげるのである。しかもこれらの結末が豫見されないといふことと、並びに不必要なる活動に伴ふ費用と骨折とが、豐富な資本をもち、商業上のあらゆる經濟の實行されてゐる、しかも最大限度の競爭の行はれてゐるところの國に於ては、有效に防止され得るであらうといふことは、爭ふべくもない。」（註14）

更に、又ソーントンと同一の立場に立つてリカァドォと對立したマルサス宛の書信の一節で、リカァドォは、次の如く述べてゐる。

「諸國民はおよそ自分自身の利害を眞實に理解したならば、比較的過剩による場合のほかには、貨幣を一方の國から他方の國へ輸出することはないだらう。私は斯ういふことを證明したと思つてゐるのです。私はたしかに諸國民は、別して今日の如く資本の用途の分化と資本の潤澤とが進んだ狀態にあつては、自分たちの供益や利潤に極めて敏感なものであるから貨幣が移動するのは、事實上移動することがこれを送り出す國にとつても、またこれを受取る國にとつても、均しく有利である場合に限られてゐると、斯う想像してゐます。この場合第一に考慮しなければならない點は、こゝに想定した場合に於て諸國の利害とは如何なるものか、といふことです。第二は、諸國の實地は如何かといふことです。ところでこの後の方の點については、明らかに私はあまり懸念する必要はありません。公衆の利害は私が述べたやうになつてゐるものだ、といふことを明白に論證すれば、私の目的にとつてはそれで充分です。世人は、事業を經營したり債務を辨濟したりする上での最善且つ最廉なる方法を知つてゐるものではない、と主張することは、私に對して何等辯明とはなりますまい。といふのは、これは事實の問題であつて、科學の問題ではなく、またなほ經濟學のほとんどすべての命題に對して主張することが出來るものだからです。（註15）」

以上の引用に明白な如く、リカァドォにとつては、科學は、諸國民が各自の利益を眞に理解し、完全な意味に於て、合理的に行動する結果として生ずる均衡狀態の追求であつたのである。こゝに、リカァドォの根本的立場を求めることが出來るのである。かゝる立場から、リカァドォは次の如き言葉も、マルサスに宛てゝ、述べてゐる。

「我々がすでに幾度も討論した諸問題に關する我々の意見の相違の一大原因は何かといへば、私には斯う思はれます。つまり貴下がいつも特定の變化の直接且つ一時的な結果を考へていらつしやるのに對して、私が斯ういう直接且つ一時的の結果を全く差し措いて、もつぱらそれから生ずる永久的の事態に注意を向けてゐるといふことにあると」（註16）。

ソーントン、マルサス、ミル等の理論が、變動過程を取扱ふ短期的な理論であるに反して、リカァドォの長期的な均衡論的立場は明白である。かくて、我々は、こゝからして、ヒュームの理論とリカァドォの理論との關聯を考察するならば、次の如く解釋し得るのである。即ち、ヒュームの說く、貨幣的不均衡→國際物價水準の不均等→貿易變動→金流出、の過程に於て、リカァドォにあつては、貨幣的不均衡の發生と同時に、貨幣的再均衡を想定する均衡論的立場から、過渡的變動過程は無視され、ヒュームに於ける最後の過程、即ち貨幣的不均衡を回復する最後の金流出の過程のみが採り上げられ、この金流出の過程が同時的に、貿易變動、即ち商品移動を伴ひつゝ、再均衡に到達すると考へられたやうに思はれるのである。（註17）かゝる觀點から考察するならば、リカァドォとソーントンの立場の相違は、單

に、イヴェルセンが言ふ如く、ヒュームの理論を、貨幣側からの攪亂の調節に適用するか、又は財貨側からの攪亂の調節に適用するか、の相違として簡單に片付けることの出來るものではあり得ないし、又エンヂェルの言ふ如く、一方的理論及び双方的理論として表面的に區別し得るものとも考へられないのである。（註18）

次に、我々は他の觀點からリカァドォ理論とソーントン＝マルサス＝ミル等の理論との立場上の相違を指摘し得る。即ち、前者の理論は供給側の立場から理論を展開せんとするのであり、この點の相違は貨幣（金）乃至財貨のトランスファー過程の説明に明確に現れてゐる。

即ち、リカァドォにあつては過剰な貨幣（金）は、先づ輸出されるのであるが如何なる理由から輸出されるのであるか。リカァドォは言ふ。「正貨の輸出はそれがその國に有利であるに非ざれば、如何なる他の貨物よりもより多く輸出される筈はない。」（註19）「通貨の輸出は、全然、利害打算の問題に歸着する。」（註20）

リカァドォにあつては、貿易過程は、輸入側の事情如何とは無關係に考察されて居り、貨幣（金）であれ、財貨であれ、それが輸出されるのは、輸出者の利潤獲得動機によるのである。リカァドォには、幾多の點に於て、金の流出入を財貨の流出入と同視しやうとする誤謬が見出されるのであるが、ディールも言ふ如く、金が國際的決濟手段としてのみ國際的に輸出入されるといふ事は、リカァドォには全然理解されて居なかつたのである。（註21）要するに、リカァドォに於ては、貨幣（金）も財貨も外國の需要により輸出されるのではなくて、利潤を求める輸出側、換言すれば、供給側の立場のみから考へられ、需要側の要因は無視されて居たのである。

次にソーントンの立場を考察するに、さきの引用に明らかな如く、先づ、金は、國際的決濟手段として、他の財貨よりも何時でもヨリ有利な用途に向け得られるものであるから、何時でも外國に於てそれに對する需要は存し、好んで受取られるが故に、輸出される。

財貨の場合も同樣である。財貨も外國の需要に應じて輸出されるのであるから、外國の需要を增大し輸出を可能ならしめるためには、輸出品の價格を低下せしめることが必要とされるのである。ソーントンのかゝる立場は、そのまゝ、マルサス、ミルと受繼がれたのであるが、此處では、貿易過程が輸入側の事情、從つて需要側の立場から説明されてゐるのであり、供給側の立場から貿易過程を説明するリカァドォの立場と明確に對立するのである。

以上述べたところからして、リカァドォの理論的立場は、供給側の見地に立つ長期的な均衡論であり、ソーントン（マルサス、ミルも同じ）の理論的立場は、需要側の見地に立つ短期理論であると言ふことが出來るのである。

（註1）Ricardo, High Price of Bullion. Economic Essays by D. Ricardo, Gonner's ed. P. 3. 小畑茂夫譯「リカァドォ貨幣銀行論集」三三頁。

（註2）リカァドォ曰く、「各國の流通媒介物の價値は、それによつて流通せしめられる諸貨物の價値に對して、或る一定の割合を保持してゐる。……その割合は流通の速度、取引者間に存在する信任及び信用の程度、殊に銀行業者の賢明なる活動に依存する。……以下の觀察に於て、私が常に同一程度の信任及び信用の存在してゐることを假定してゐることを、承知しておいてもらいたい。」と。（ibid, P. 34. 小畑譯七九頁―八〇頁）

（註3）リカァドォの國際的貨幣的均衡の内容をなす貨幣價値と財貨價値との間に於ける一定の價値的相對關係の成立と、各國に於ける貨幣價値の均等の成立とは矛盾なく兩立するものではない。（岩田仮「國際貿易理論序説」六五頁―六六頁）然し、この場合、リカァドォの意味する國際的貨幣價値の均等は爲替相場で測つて均等といふのである。

（註4）Ricardo, ibid, PP. 4―5. 小畑譯三五頁―三六頁

（註5）この場合、リカァドォの言ふ「稀少性」は主觀的な意味のものではなく、客觀的な規準に則しての「稀少性」であつた。貨幣價値決定要因として指摘されたこの「稀少性」こそ、金屬主義的見解と金數量説的見解との連結環であつた。

（註6）Henry Thornton, An Enquiry into the Nature and Effects of the Paper Credit of Great Britain. ed. by Hayek. P. 141.
（註7）Henry Thornton, ibid, P. 143.
（註8）松井清「貿易理論の研究」一五九頁參照
（註9）Carl Iversen, Aspects of the theory of International Capital Movements. P. 200.
（註10）Carl Iversen, ibid, P. 200.
（註11）Jacob Viner, Studies in the theory of International trade. P. 293.
（註12）James W. Angell, The theory of International trade. P. 57.
（註13）Carl Iversen, ibid, P. 200.
（註14）Ricardo, ibid, P. 45. 小畑譯九六頁—九七頁
（註15）Letters of David Ricardo to Thomas Malthus, ed. by J. Bonar. P. 18.（中野正譯（岩治文庫）上卷四〇頁—四一頁
（註16）Letters. P. 127. 中野譯、下卷一〇頁
（註17）増井光藏「國際支拂理論に於けるリカルドオの立場」（國民經濟雜誌第六十四卷一號）
（註18）違つた立場からであるが、岩田仮氏も、リカァドォの立場は、エンヂェルの言ふ如く、一方的理論でないことを主張されてゐる。（岩田仮「國際貿易理論序說」八六頁—八七頁）
（註19）Ricardo, ibid, P. 6. 小畑譯三七頁、
（註20）Ricardo, ibid, P. 11. 小畑譯四五頁、
（註21）Karl Diehl, Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Ricardos Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung, II. S. 226.

三

リカァドォ及びソーントンの理論的立場を以上の如く解釋して、こゝから、先に引用した凶作の發生、それに伴ふ穀物輸入超過と金流出をめぐつて兩者の間に展開された論爭を改めて考察してみよう。

先に引用した如く、ソーントンの主張に對して、リカァドォは二の質問を提示する。

一、ソーントン氏は、何故外國がその穀物の對價として吾々の財貨の受取を喜ばないかを說明して居ない。

二、しかも氏としては、かゝる不同意の存する場合に於て、何故吾々が吾々の鑄貨の提供を承諾して、相手方の不同意を滿足せしめるのであるかを說明する必要があるであらう。

近代論者に依り主張せられ、一般に承認されてゐる見解に從へば、ソーントンが明らかに外國の需要狀態を、その理由として示してゐるにも拘らず、リカァドォが右の第一の質問に見られる如き疑問を提示してゐるからには、恐らく、リカァドォは、外國の需要狀態に關し、ソーントンの見解に反對して居る、換言すれば、ソーントンが、外國の需要狀態を一定と考へてゐるに反して、リカァドォは、恐らく外國の需要狀態が可變的であると考へてゐるものと解釋されてゐる。こゝから更に、外國の需要狀態を不變と考へるソーントンは國際支拂機構に於て購買力移轉を無視せるに反し、外國の需要狀態を可變的と考へたリカァドォは、國際支拂機構に於ける購買力の移動を認てゐたものと解され、從つて、このソーントンとリカァドォとの對立が、後年のケインズとオーリンとの對立の先驅として考へられて居るのである。

然し、以上の如き解釋は、ソーントン及びリカァドォの理論的立場の相違を無視せる、誤れる解釋であると言はね

ばならない。先づ、最初に注意すべき事は、この論爭に於て、ソーントンとリカァドォとが、互に根本的に相容れざる立場に立つてゐることである。ソーントンが、彼の理論を一貫する需要側の立場から論ずるに反して、リカァドォは、彼自身の供給側の立場で論じてゐるのであるといふことを明確に認識することが必要である。この點は、ソーントンに對するリカァドォの第二の質問、即ち「しかも氏としては、かゝる不同意の存する場合に於て、何故吾々が吾々の鑄貨の提供を承諾して、相手方の不同意を滿足せしめるのであるかを、說明する必要があるであらう」といふリカァドォの言葉からも明確に覗ひ知ることが出來る。ソーントンにあつては、鑄貨も財貨も、相手方（輸入國）で、滿足して受取られ、需要されるからこそ輸出されるのである。これに反して、リカァドォにあつては、鑄貨も財貨も自國に於て有利であるからこそ輸出されるのだといふ供給側（輸出側）の立場に立つて論ずるのであるから、ソーントンの如き需要側（輸入側）の立場に對し、リカァドォが、かゝる質問を提示するも蓋し當然であると考へられるのである。かくの如き、ソーントンとリカァドォとの根本的立場の相違の理解の上に立つて、第一の質問の意味するところも、明瞭に理解する事ができるのであるが、資本移動論に於ける近代論者は、少くともこの點を明確に把握して居ないと言へるのであつて、これが、彼等が誤れる解釋を試みるに至つた原因である。即ち、彼等近代論者は、右のソーントンに對しリカァドォが提示した第一の質問からソーントンとリカァドォとが、外國の需要狀態に就て見解を異にし、前者が外國の需要狀態を不變と考へるに對し、後者は恐らくそれが可變的であると考へたのであるといふ解釋を導くのであるが、かゝる理論的推測は、ソーントンとリカァドォとの根本的立場の相違を最初から意識せぬ場合には尤ものことであると考へられるにせよ、ソーントン及びリカァドォの根本的立場を考慮するときには、到底、承認し得ざるものである。蓋し、供給側（輸出側）の立場のみから理論を立てゝゐるリカァドオが、需要側（輸入側）の立場に立つソーントンと、外國の需要狀態そのものについて論じてゐるとは考へられないからである。この場合に於ても、リカァドォは、供給側（輸出側）の立場から考へてゐるのである。リカァドオにあつては、彼の供給側に立つ均衡論的立場からして、國際的不均衡が生じた場合に、諸國に於ける貨幣及び財貨間の不均衡を通じて、一國に於て鑄貨又は財貨の輸出が有利であるが如き狀態が生じると、それと同時に外國に於ては、それらの鑄貨又は財貨の輸入が有利であり、他の財貨の輸出が有利であるが如き狀態が惹起されることになつてゐるのである。（註2）從つて、リカァドォの立場からは、一國が輸出することが有利であるが如き鑄貨又は財貨を輸出した場合、それらの鑄貨又は財貨は、彼の均衡論的立場からは、外國の需要狀態について何等考慮することなく、外國で輸入されることになるのである。故に、かくの如き立場から論ずるリカァドォにとつては、たとへソーントンが外國の需要狀態から如何に說明しようとも、それは、輸出された鑄貨又は財貨が外國で受取られない理由としては成立するものではないと考へられたのである。リカァドォの立場を斯くの如く解釋して、はじめて我々は、リカァドォがソーントンに對して、「何故外國がその穀物の對價として吾々の財貨の受取を喜ばないかを、說明してゐない」と、主張した理由が明確に理解出來るのである。

かくの如く論じてくるならば、我々は、確信を以て、次の如く主張し得る。即ち、リカァドォとソーントンとは、外國の需要狀態そのものについて論じ、この點で見解を異にしたものではないといふ事である。かくて、リカァドォが、外國の需要狀態を可變的であると考へゝから更に支拂機構に於ける購買力の移轉を認めてゐたと主張する近代論者の解釋は、その根據が全く失はれるのである。更に、ゝから、リカァドォと近代理論との間に理論的關聯性を認め、リカァドォの立場をトランスファーの「近代的理論」として、ドイツ賠償金支拂をめぐつてケインズと論爭し

たオーリンの理論の先驅として承認する近代論者の解釋も、リカァドォ理論の根本的立場を把握せず、（註3）たゞリカァドォを近代理論の側から一方的にこじつけた誤れる解釋であると言はなければならない。

ソーントンとリカァドォとの間の論爭は、結局、彼等の根本的理論的立場の相違に歸し得るのであり、トランスファー理論に關する限り、リカァドォの理論は近代理論との間に何等の理論的關聯性も認められ得ぬことは、以上述べた如くである。トランスファー理論に於て、古典學派理論と近代理論との掛繋ぎは、ソーントン＝ミルの理論であり、ミルとバステーブルとの對立こそ、（註4）ケインズとオーリンとの論爭の先驅として承認されるべきである。

（註1）リカァドォの均衡論的立場からは金流出と財貨移動とは同時的に行はれる。それ故「鑄貨の輸出は不利な貿易差額の結果ではなくて、寧ろその原因である。」(Economic Essays by David Ricardo, Gonner's ed. P. 11) といふリカァドウの主張は論爭のための誇張であると解せられる。

（註2）この點についてリカァドォはマルサスに宛てた書信の中で、明確にのべてゐる。「…事實上移動することが、これを送り出す國にとつても、まだこれを受取る國にとつても均しく有利である場合に限られてゐると、斯う想像してゐます。」(Letters of David Ricardo to Thomas Malthus, 1810—1823, ed. by J. Bonar. P. 18) 中野正譯（岩波文庫）上卷四十一頁）

（註3）リカァドォの理論的立場を現解せざる近代論者、例へば、イヴェルセンは次の如く言ふ。「リカァドォは、何故かゝる不同意が存在すると期待し得ぬかについて、それ以上説明しなかつた。」(Carl Iversen, Aspects of the theory of International Capital Movements, P. 202.)

ヴァイナーは次の如く言ふ。「借入金のために、貸附國の製品に對する借入國の需要が、何故に、あるひは如何にして、增大して、同一の價格にてヨリ多量の商品を買取るにいたるかを、リカァドォは證明することが出來ない。」(Viner, Canada's Balance of International Indebtedness.1900—1913. P. 197)

イヴェルセンもバイナーもいづれもリカァドォの立場を理解せぬ發言である。

（註4）Bastable, On some applications of the theory of international trade (Quaterly Journal of Economics. Oct. 1889)

あとがき

我々は以上に於て、國際資本移動に於て近代論者が古典學派の理論的立場を理解せずに、逆に近代理論の觀點から一方的に古典學派理論を解釋して誤謬に陷つてゐることを見た。

いふまでもなく、古典を近代的觀點から再檢討することは絶對必要不可缺なことであるが、この事は、古典の理解を前提としてのみ可能である。古典そのものを明確に理解せずして、一方的に近代的觀點から古典を解釋しても、求められるものは、誤謬と混亂のみであり、そこには、學問的に意義あるものは何も求められない。かゝる好例として、我々は、資本移動論に於ける近代論者の古典學派理論に對する解釋を指摘し得るのである。